
屋根裏ライブラリー

Ratio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋根裏ライブラリー

【Nコード】

N8948J

【作者名】

R a t t i o

【あらすじ】

一度も入った事の無い屋根裏部屋。

ある日ちよっとしたこと、初めて足を踏み入れる。

しかしそこには、『ピピ』という女の子のいる図書館があった。

僕の住む家には屋根裏部屋がある。

二階から梯子を使って昇り、人一人がギリギリ通れるくらいの入り口を開くとそこにある。

特に用事もないし、今まで一度も屋根裏には入ったことはなかった。

だがある日、僕はちよつとしたきっかけで屋根裏部屋に入ることになる。

僕はその日、ある本を探していた。全五巻からなるシリーズ物の本で、三巻がどこにも見当たらなかった。

そこで僕はもしやと思い、母さん達がない隙を見計らって、屋根裏部屋への梯子を昇った。

長めの棒を使って入り口を開き、中によじ登る。しかしそこで見たものは、想像していたものとは大分違っていた。

まず、そこはかなり広かった。家の面積など遥かに超えているだろう。

そしてそこには沢山の本棚が並び、そこにはもちろん本もぎっしり入っていた。あたりを見回せば、いくつかの椅子や机、柔らかなうなソファも置いてあった。カウンターもあり、「貸し出し」と

「返却」に分かれていた。

そう、そこにあったのは、大きな図書館だった。

「……ここはどこだ？」

僕が驚いて、立ち尽くしていると、後ろから足音が聞こえてきた。振り返ると、そこには小さな女の子が本を抱え、立っていた。

栗色で長めの髪を後ろで束ね、真っ白なYシャツに黒いスカート、そして緑色のエプロンをしている。人形みたいな女の子だった。

「屋根裏ライブラリー」

女の子は突然そう口にした。

「え？」

「この名前、屋根裏ライブラリー」

「ああ、そうなんだ。屋根裏ライブラリー……。ええと、君はだれ？」

僕は慎重に尋ねる。すると女の子は静かに口を開く。

「ピピ」

「ピピ？」

「そう、ピピ」

変わった名前だな、と思いながらも僕は次の質問をする。

「じゃ、じゃあピピ？ここは、なに？その・・・屋根裏ライブラリーだっけ？僕の家屋根裏部屋だったと思ったんだけど」

そういうと、ピピは少し困ったような顔をして

「私にもわからない。私は気付いたときからここに居た。ずっとここにいたから、外の事は本でしか知らない。人と会ったのもあなたが初めて」

「え、ずっとここに？」

「うん」

どういうことだろう。どうして誰も気付かなかったんだろう。屋根裏部屋にこんな場所があるなんて。

「あなたはどうしてここに？」

「え？ああ、そうだ、本を探しに来たんだ」

「そう。ここにある本は好きに読んでいいよ。ただ、外には持って

いけないからね」

「う、うん。わかった」

貸し出し、返却カウンターがあるのにそれもおかしな話だと思ったが、黙っておいた。

するとピピはスタスタと本棚の奥へと行ってしまった。

僕は探していた本を探す事にした。

目的の本はすぐに見つかり、僕は手ごろなソファに腰をかけ、そこで読み始めた。

色々と思議に思う事はあったが、ここが図書館で僕には読みたい本があったから、何も言う事は無かった。

しばらくすると、ピピがやってきた。さっきとは違う本をいくつか手に持っている。

僕の隣に腰を掛け、その本を読み始めた。僕らは二人、静かに本を読んだ。

ふと気付くと、目の前にはピピが立っていた。どうやら僕は眠ってしまったらしい。

「もうすぐ閉館の時間だよ。あまり遅くまでいないほうがいい、元の場所に戻れなくなっちゃうから」

「そ、そうなんだ。わかった」

僕は慌てて体を起こし、入り口に向かう。ピピも後からついてきた。

入り口を開け、僕は振り返る。

「ねえ、また明日も来て良いかな？」

「うん、もちろん」

ピピは微笑んだ。初めて見る笑顔だった。

それから僕は頻繁に屋根裏ライブラリーに通うようになる。

毎日、屋根裏ライブラリーに行くのが楽しみになっていった。学校

が終わるとまっすぐ家に帰り、閉館時間まで屋根裏でピピと本を読んだ。

ただ二人並んで本を読むだけだったけど、僕はピピとのこの時間が楽しく、幸せだった。

しかしそんなある日のことだった、僕は家を引っ越す事になってしまう。

母さん達にいくら抗議をしても、それは揺るがないことだった。

僕は慌てて屋根裏ライブラリーに行く。

「ねえ、ピピ。一緒に外に出よう？ここよりいいところじゃないかもしれないけど、図書館もあるんだ。母さんや父さんにも君を迎えてくれるように言う。ねえ、一緒に行こう」

「・・・ごめんね、私はここから出て行けない」

ピピは苦しそうに言った。

「え、どういうこと？」

「このこと、あなたの場所は違う世界。私はあの入り口は通れないの」

「そんな・・・」

「ごめんね、ごめんね。私もあなたと一緒に行きたい」

ピピは泣いていた。それを見て、僕も泣いてしまう。

僕ら二人の泣き声が、屋根裏に響いていた。

引っ越し当日、僕は屋根裏ライブラリーに忍び込んだ。

ピピは驚いたように立っていた。

「・・・どうして？」

「僕はここに残るよ。君と一緒に、この天井裏ライブラリーに」

「・・・ダメだよ。ここに長くいたら、君はもう戻れない」

「いいんだ。僕はピピとここにいたい」

僕はピピを抱きしめた。

「・・・・・・そう」

ピピはそう呟くと、僕の手を引いて歩き出す。
カウンターの『貸し出し』の方に僕らは立つ。

「君が本気なら、連れて行ってあげる」

「うん」

ピピはカウンターの向かい側に立ち、紙に文字を書き始める。

『名前』の欄に、僕の名前が書かれる。

すると、突然紙から光が溢れてきた。光は僕とピピを暖かく包んだ。

ピピは優しく微笑み、僕に言う。

「あなたが返しに来てくれるの、ずっと待ってるから」

目が覚めた。すると僕は泣いていた。

何故だろうか。多分、見ていた夢に関係するのだろうけど、うまく思い出せない。

キッチンでは妻が朝食の支度をしていた。そこで僕はふと思い出す。

「そういえば、この家には屋根裏部屋があったな」

「ああ、そういえばね」

「懐かしいな。昔よく、自分の家の屋根裏で本を持ってきて読んだな」

「ああ、あれ？あなたが言ってた『屋根裏ライブラリー』ってやつ？」

「ははは、そうだったな。……なあ、朝食を食べたら行ってみようよ」

「ええ」

僕と妻は、朝食を食べ終え屋根裏部屋に向かった。

「ねえ、これ」

妻が指す先には、小さな人形が壁にもたれかかるように座っていた。

「なんだろうな、前に住んでいた人が残していったのかもな」

「ふふ、かわいいわね」

そう言っ、妻は大きくなった腹を優しく撫でた。

「きつとこの子もこの人形みたいに可愛くていい子に決まってる。

あ、そうだ。その子の為にまた屋根裏ライブラリーを作っておこうかな」

「ふふっ、それはいいかもね。

ねえ、あなた。私、幸せだわ」

「ああ、僕もだよ」

光の中で、ピピは言った。

「大丈夫。そこには沢山の本もあるよ」

「君は？」

「うん、もちろん」

僕は光の中を進んでいった。ふたり一緒に、手を繋いで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948j/>

屋根裏ライブラリー

2010年10月8日15時24分発行